

青森県知事賞

さよなら反抗期

大館中学校（八戸市）二年 水石 萌菜

最近、母に文句を言うことが増えました。母のことが嫌いになったとかそういうことではないのですが、なぜか口から出る言葉が文句になってしまふのです。

「今、舌打ちしたでしょう。」

「はあ。してないし。」

「言いたいことがあったら、きちんと言えればいいじゃん。」

「はあ。だから何もしてないし。」

何でもないことなのに、つい言い合いになってしまいます。それでも小さい頃からの我が家のルール。

「いっせえのおでっ。いただきます。」

で仲直りできていました。家族全員が手を合わせて、

「いただきます。」

をするのが我が家の絶対ルール。生まれてから今まで守らなかった日はありません。

誰かが何かをしても絶対みんな待って

「いただきます。」

をするのです。でも、ある日、私はたった一度、そのルールをやぶってしまいました。

その日は、部活動の練習がきつくてとても疲れていました。その上、友達言葉が

気に入らなくてイライラしていました。帰宅後もむっつとしていて、母の言葉も無視し

ていました。その時は、母の気持ちを考える余裕がなく自分の気持ちを自分でも持て

あましていました。

「ごはんだよ。」

母の声がしたので、何も考えずに席につきました。

「いっせえのおでっ。いただきます。」

母の声だけが響きましたが、私はそのまま無意識に黙ってごはんを食べようとしまし

た。

「食べなくていいっ。」

母のどなり声にはっとして顔をあげると、母が真剣な表情で怒っていました。

「つかれてるかもしれない。イラついているかもしれない。でもそんなの、お米を作

ってくれた人に関係ある？あんたの勝手でしょう。一生懸命、お米一粒一粒に愛情を

こめて作っている人に礼をつくせないのなら食べなくていいっ。食べる資格ないっ。」母の言葉に私は何も言い返せませんでした。小さい頃は、おばあちゃんの手作りお米で育ちました。その時、おばあちゃんに感謝の気持ちをこめて「いただきます。」をすることをいつも教えられ、心がけていました。年をとってお米づくりをおばあちゃんに引退してもお米には作った人の思いがまつているといつも教えられてきました。それなのに、その感謝の気持ちを忘れて食べようとしてしまったのです。

「感謝の心がない人間に、食べさせるお弁当なんてつくらないよ。明日は自分で早起きして作りなさい。」

母と大げんか。やってしまった…と後悔はしたものの、素直に謝ることもできず、気持ちは落ちこむばかりでした。

次の日の朝、いつもより早く目が覚めた私の鼻を、炊きたてのごはんのにおいがくすぐります。ごめんなさいの気持ちをこめて

「おはよう。」

と小さな声で言うと、

「はい、お弁当。」

と手渡してくれました。見ると、私の大好物の「おにぎらず」が四つも入っていました。

食卓につくと、すぐに母の号令。

「いっせえのおで。」

「いただきます。」

私は、手を合わせて大きな声で言いました。ひとくち食べたごはんは、今まで食べた

ことがないくらい甘くて、母と二人で

「おいしいね。」

白米が笑顔をはこんでくれました。

